DOSHISHA
CLOSE UP

携帯電話が短歌の世界を拡大

―反響を呼ぶ「SEITO百人一首」と「介護百人一首」

女子大学が世界の高校生を対象に2002年から始めた「SEITO百人一首」には年々応募者が増え、短歌人口の裾野を拡げています。また、NHK教育テレビ「介護百人一首」で反響を呼んでいる「介護短歌」。これらの短歌を提唱し、リードする女子大学教授で歌人の安森敏隆氏に、新しい短歌の魅力や可能性について伺いました。

短歌の可能性を広げた「SEITO百人一首」

同志社女子大学が国内外の高校生を対象にして行っている短歌コンクール「SEITO百人一首」が反響を呼んでいます。第1回の2002年度は8420首だった応募数が、2006年度には英語短歌を含めて約2万8000首と大幅に増加。女子大学の積極的な広報活動の甲斐もあり、現在は授業に採り入れている高校が全国各地に増え、短歌人口の裾野を着実に拡げています。その提唱者が安森教授です。

「SEITO百人一首」では携帯電話やパソコンからのメールによる応募があり、同時にメール、パソコン、携帯電話を素材にした作品も少なくありません。父親に面と向かって言えなかったこともメールになら書ける。逆に、携帯メールで思いを伝えることに寂しさを感じ、携帯を置いて会いに出かける。「SEITO百人一首」には、IT社会の申し子ともいえる現代高校生の生活や精神性が鮮やかに詠み込まれています。また安森教授は京都新聞で「ケータイモバイルつらねうた」と題し、携帯で撮影した「写真」と「短歌」を連歌風に組み合わせて十数人の学生達で詠いながら繋ぐという試みも行いました。これら一連の取り組みは「ケータイ短歌」なる言葉を生み出し、現在は同様の試みをするマスメディア、学校が増えています。

「携帯電話でメールを書く作業には速記に近いすごい能力が秘められている。ここ千数百年間の文字の歴史においても、大きな変革では」と安森教授。携帯メールは相手との同時体験ができる。従来のように「メモ」や「ノート」に書くという、きわめて目的的な文字の用い方ではないが、目的的でないところが、今の若者にとっては「目的的」なのではというわけです。

全国に巻き起こった介護短歌ブームの火付け役

安森教授が現在力を入れているのは「介護百人一首」。2002年、介護情報誌『らくらく　京都・滋賀の介護・医療』（メディアプロデュース発行）で、はじめて取り組んだ「介護百人一首」特集が反響を呼び、2004年からはテレビ番組「NHK介護百人一首」の中でも、安森教授が選者の一人となって作品の募集・紹介を行っています。介護する側、される側の両方から投稿があります。「開始時は数百首も来れば上出来と考えていたところ、〈NHK・福祉ネットワークスペシャル〉で募集したところ、あっという間に6500首が集まって驚きました」。

そう語る安森教授自身もまた、母を介護し、見送った経験者です。あるとき淑子夫人が詠んだ介護短歌を読んでその生き生きとした描写に驚き、以来夫婦で詠み綴った作品を歌集『介護うたあわせ　介護・女と男の25章』（京都修学社／英伝社）にまとめました。介護短歌は現在NHKの番組だけにとどまらず、「PLC日本予防医学研究所のホームページ」（http://www.nihon-yobou.com/）などでも月々募集・紹介されています。

安森敏隆
（やすもり・としたか）
女子大学学芸学部教授、歌人。1942年広島県生まれ。現代歌人集会理事。著書に『斎藤茂吉短歌研究』（世界思想社、1998年）、『大学教授の介護日記』（新葉館出版、2001年）ほか多数。

短歌とは「訴える」こと

介護短歌への予想を超えた反響を、安森教授は次のように分析します。「介護短歌は、まさしく〝いのちの先端〟をうたうもの。介護の現場で歌を詠むことは、訴えることであり癒しであり、必然的な行為なのです」。

「五七五」でスパッと切り取った世界に、自己の世界観や理屈を加えるのが「七七」。したがって「七七」を見れば、作者にとって訴えたいことがあるか否かが瞬時に分かるといいます。安森教授は「SEITO百人一首」に寄せられた膨大な作品の一次選考を担当していますが、最初の「五」と最後の「七七」を見ることによってたちまち数が絞られていくそうです。「無理に飾って詠んだ歌はすぐに分かる。ところが介護百人一首ではなかなか数が絞りきれない。訴えたいことがとても多くあるのですね」。

短歌を詠むことは、半歩ほど地上を跳び上がって訴えること。ぎりぎりのところに立って叫ぶこと。安森教授は「SEITO百人一首」を応募してくる高校生たちについて、国語教育のとても重要な〈場〉であると同時に、一つの通過口と捉えています。「99・9％の生徒は卒業以降、短歌と無縁かもしれませんが、一度作るという体験をしたということが重要なのです。彼らが成長して、何か訴えたいものをもった時に、短歌の世界を思い出してくれれば。学生時代に経験する同志社での礼拝の時間と共通するところがあるのではないでしょうか」。

「SEITO百人一首」入選作品は同志社女子大学が毎年冊子にまとめていますが、過去5年間の作品を収録した出版計画も進行中です。今後も安森教授の精力的な活動と、幅広い短歌の浸透を期待したいものです。

「SEITO百人一首」に入選した同志社系列高校生徒の作品
（学年は投稿当時）

ケータイもツタヤのカードも
持ってない私はまさに明治の女
（女子高校2年・三田真由美／2002年度入選作）

メールしか残っていない想い出は
ボタン一つで全消去
（同志社高校2年・山口洸平／2003年度入選作）

耳たぶにきらり石ころ光らせて
ちっちゃな主張幼い私
（国際高校2年・武田真優子／2005年度入選作）

魂をぬかれたように眠ってる
サラリーマンが今日も目の前
（香里高校3年・塩﨑将一朗／2006年度入選作）

DOSHISHA
CLOSE UP

同志社ローム記念館プロジェクト

幼児から高齢者まで「みなメールプロジェクト」が始動

―マイクロソフト(株)との産学共同プロジェクト

女子大学学芸学部助教授
(情報メディア学科)
和氣早苗

「幼児から高齢者まで」世代を超えてメールのやりとりを

ビジネスにおいてもプライベートにおいても、Eメールはなくてはならないコミュニケーションツールとなりました。学生も手紙や電話を使うことは稀で、メールを多用して友人達とのやりとりを行っているようです。しかし、このようにメールを便利に利用しているのは、一部の世代に限られていることもまた事実です。現状メールを利用するには、パソコンや携帯電話の利用が不可欠であり、これらは決して容易に使えるものではありません。

おちゃメールの画面

私達みなメールプロジェクトでは、これまでメールを使ったことがない人々や使えない人々が、メールを苦労なく使えるようにすることを第一の目標にしています。また、世代を超えた人々の交流に、メールが貢献できるようにすることも目標にしています。そのために私達はまず、タブレットPCの利用を前提にしたメールソフトを開発しました。タブレットPCとは、キーボードを使わず、ペンで画面上に字を書くことで操作が可能なパソコンです。これを用いて私達は、字が書けない子どもでもお絵かきを楽しんでメールを送ることができる幼児向けのメールソフト「おちゃメール」を開発しました。紙に字や絵を「かく」という概念を活用して、ペンで画面上に書いたものを手紙のように画像としてメール添付して送れるようになっています。これに、別途開発した高齢者向けメールソフト「吟メール」を用いて、現在高齢者・幼稚園児・そして学生も交えた3世代間のメール交流実験を行っています。

学生10名を中心とした産学共同プロジェクト

「みなメールプロジェクト」は、産・官・学・地域連携による人材育成をコンセプトとした『同志社ローム記念館プロジェクト』の一つとして活動しています。マイクロソフト株式会社の支援の下、現在10名の大学生メンバー(1年〜4年生)が中心となって活動を進めています。メール交流実験には同志社幼稚園および介護付有料老人ホーム「宝塚エデンの園」の大きな協力を得ています。

プロジェクトは、ソフト開発、サウンド、レクチャー・コミュニケーション、システム・Webという4つのグループから構成されますが、それぞれのグループは強く連携しています。ソフトウェア開発ではソフト設計やコーディングの他、キャラクタデザインや操作を誘導するためのインタフェースサウンドのデザインも行いました。またソフトウェアの使い方を覚えてもらうため、高齢者に対しては見やすくわかりやすいマニュアルを制作し、幼児に対しては人形劇で使い方をレクチャーしました。メールのための通信環境整備やグループ間の進捗管理のためのblogやWebサイトの運営も重要な活動です。

このような活動の報告として2006年11月21日、同志社幼稚園にて、みなメールプロジェクトの公開デモンストレーションを実施しました。ここにはマイクロソフト インターナショナルのプレジデントであるジャンフィリップ・クルトワ氏が視察に来られ、また同時にマスコミの取材も受けました。園児たちがビデオチャットでつながった高齢者施設「宝塚エデンの園」の高齢者たちとメールの交換をする様子を公開しました。園児たちはペンでタブレットPCに様々な絵や文章を書き、手際よく使いこなしていました。園児がバスの絵を送ると、スクリーンに映しだされた高齢者はタブレットパソコンに届いたバスの絵を嬉しそうに抱えて、またそれを園児に見せてあげていました。その後、高齢者から「バスに乗ってどこに行くのですか?」等と書かれたメールが届き、園児は嬉しそうに読んでいました。

メールが本当の文化的ツールとなるために

現在、技術が進み新しいコミュニケーションツールが次々と世に提案されています。しかしこれらが本当の意味で世の中に定着し、新しい文化となるには、それが誰にでも使えるものでなくてはならないと私達は考えています。みなメールプロジェクトのゴールは全ての人々がメールを使えるようになることにあります。今後は、病気でベッドに寝ている状態である方や障がいのある方等、どのような健康状態や環境でも使えるようなメールツールを開発していきたいと考えています。

公開デモの様子。モニターに映った「宝塚エデンの園」のお年寄りたちとメールを交換する園児たち
(2006年11月21日、同志社幼稚園)

「吟メール」および「おちゃメール」は、「みなメールプロジェクト」のWEBサイト(http://mgen-com.drm.doshisha.ac.jp/)からフリーでダウンロードできるようになっています。少しでも多くの方々の役に立つことをメンバー一同願って活動をしています。

DOSHISHA
CLOSE UP

子どもたちの知的好奇心が高まる
本物との出合い
～多くの方々の温かい支援に支えられた同志社タイム～

小学校教諭・学務幹事
石川　博三

同志社タイムとは

130年もの歴史と伝統を持つ同志社には、多種多彩な人材のネットワークがある。この貴重な財産を生かし、各界で活躍する卒業生などを講師に迎え、子どもたちに本物と真正面から向き合わす時間、それが「同志社タイム」である。本物の真髄に触れることで、子どもたちの感じる心と考える心を育むことを目ざしている。

今年度実施した内容

第1回　2006年5月8日（月）

同志社大学文学部教授山田和人先生を中心に開催された。大蔵流狂言師木村正雄先生や観世流シテ方井上裕久先生が「狂言」や「能」を演じて、新島襄の心を子どもたちに分かりやすく伝えてくださった。日本の伝統芸能に触れながら、新島襄の思いに触れることができた。

第2回　6月28日（水）

同志社大学応援団を迎えて開催された。応援団指導部の迫力のある応援、きびきびとした動きのチアリーダー。吹奏楽部からは楽器紹介があった。小学生も声をはりあげ一緒に歌った「若草萌えて」や「カレッジソング」はアリーナ中に響き渡り、胸が熱くなる思いであった。最後は「校歌」を歌い上げ、団長からの激励のメッセージをいただいた。保護者、子どもたち、応援団の心がひとつになった同志社タイムだった。

「能」に親しみを感じた瞬間

第3回　10月23日（月）

同志社大学卒業生で「名探偵コナン」の毛利蘭役でおなじみの声優・山崎和佳奈さんと山崎さんの友人で江戸川コナン役の高山みなみさんが来校、お話を伺った。何日も前から楽しみにしていた子どもたちは、山崎さんや高山さんが登場すると大歓声をあげて迎えた。声優の仕事について話を伺い、山崎さんや高山さんが子どもたちの目の前でアフレコをされたあと、子どもたち、保護者、そして教員が、山崎さんや高山さんから指導を受けながらアフレコに挑戦した。何回か挑戦し、うまくができると、みんなから大きな拍手が起こった。あっという間に時間が過ぎ、大いに盛り上がった同志社タイムが終了した。

みんなでアフレコに挑戦!!

第4回　11月15日（水）

童謡「サッちゃん」や「いぬのおまわりさん」などの作曲で高名な作曲家・大中恩（めぐみ）先生が来校、北原聖子先生や宮下俊也先生とともにコンサートが開催された。

大中先生が同志社小学校校歌の作曲者でもあることを知っている子どもたちは、胸を高鳴らせながら、この日を待っていた。いよいよコンサートが始まる時刻。3年生が校歌を歌って先生方をお迎えした。その後、詩の朗読やピアノの独奏、歌唱と盛りだくさんの内容で大いに楽しませていただいた。大中先生の「上手に歌う人はたくさんいますが、自分の心を歌で表現し、その心を相手に伝えることのできる人は少ないですよ」との言葉が印象に残った。コンサートの終わりには、大中先生からの提案で大中先生自ら指揮をされ、子どもたち、保護者、教職員全員で校歌を歌った。自分たちの歌声がアリーナに響いたとき、一体感を感じた。

この後、第5回同志社タイムは12月13日（水）、同志社大学神学部教授関谷先生のゴスペルグループをお招きしたクリスマス礼拝・クリスマス祝会を行った。また、第6回は2007年2月7日（水）、同志社大学総合政策科学研究科に在籍中の舘林千賀子さんが介助犬アトムを伴って来校、日常生活を共にする介助犬について感動的な話を披露された。子どもたちは、感謝の気持ちや生きることの意味合いを感じ取ったようである。

心暖まる大中先生のコンサート

ものごとの本質を学ぶことを通して、子どもたちの知的好奇心を高め、心を耕す同志社タイムは、このように多くの方々の温かいサポートと熱い思いに支えられ成り立っている。